Book Review 36-34 誘拐　＃キングの身代金

『＃キングの身代金』（エド・マクベイン著）を再読した。堂場瞬一氏の新訳でよみがえる警察小説の金字塔というキャッチコピーに惹かれて読んでみた。ニューヨークに似た架空の街アイソラを舞台に刑事たちが奮闘する〈87 分署〉シリーズである。1956 年～2005 年まで 50 年にわたり全 56 作が書き続けられ、米国のみならず、日本でも多くの作品が映像化された。黒澤明監督の映画「天国と地獄」の原作は本作である（近く黒澤映画の「天国と地獄」をスパイク・リー監督が、デンゼル・ワシントン主演でリメイクするという）。

G 製靴会社の重役であるキングに、息子をさらったという脅迫電話がかかってきた。しかし、実際に誘拐されたのは、キングの運転手の息子だった。このことを伝えても誘拐犯は、間違い誘拐でも構わないからとにかく身代金を払うことだという要求を繰り返す。キングは、少年の命と、そして今後の人生を買うために（会社の全権を握るために）生涯を掛けて積み上げてきた「命金」の果たしてどちらを選ぶのか。たとえ、一人の子供の命がかかっているとはいえ、軽々に投げ捨てることのできる金額ではない。しかし、もし子供を見捨てれば、たとえ会社を手に入れることができても、彼には「金のために子供を見捨てた男」という烙印が押されることにある。キングが追い込まれたのは、このような二律背反の状況であった。
　この二律背反をどう乗り越えるのかが興味深いところなのに、本作ではここに焦点を当てていない。キングは悩まず我が道を行くうちに、犯人側が勝手に自滅して物語は終焉を迎えるのである。

一方、本作の息子とその友達を取り換えて誘拐するという話を採用して制作された黒澤明監督作品『＃天国と地獄』は、本作より秀逸である（数多の映画賞を受賞している）。捜査側のパートをじっくりと描きこみ、あの手この手の捜査の末に少しずつ犯人の住居を絞り込んでいくサスペンスを演出した。また身代金を請求された男の、気も狂わんばかりに苦悩して身代金を支払いながらも、結局莫大な借金を背負い破滅していく姿を描いている。身代金受け渡し方法（身代金が入ったカバン[吉田カバン特性]を特急「こだま」の窓から投げ落とす）も話題に上った。現実の現金受渡し目的の犯罪で数多く模倣されているそうだ。
主犯が邸宅の近所の下宿に住む医師インターンの男であることが私には気になる。将来のある医師が殺人・誘拐をしてまで大金を得ようとするだろうか（昔の医師はそんなに貧しかったのか）。犯人の男は邸宅に住む男が天国、自分が地獄にいたという恨みを語るのだが・・・。後半、トランペットの音楽とともに煙突

から桃色の煙が立ち上るというモノクロ画像に色を入れるという手法は、その後に多くの監督に模倣された。
見どころ満載の映画である。原作と映画を比較するのは楽しい試みである。